又三百五十四日、小歳之法也、日與月會、而月之不及日數六日、則成小月也、名朔虛、此氣朔合、一歳十二日餘、故一年三百五十四日也、三歳得三十六日、則有一閏、猶六日餘、又至于二年得二十四日、前餘六日與今二十四日合得一月之數、故五歳有再閏、但知何月者、以推歳之術決定矣、一歳之大數、自今年立春至來年立春前日、三百六十六ヶ日、是大歳數也、

〔日知錄四〕閏月　左氏傳文公元年、於是閏三月、非禮也、襄公二十七年十一月乙亥朔、日有食之、辰在申、司歷過也、再失閏矣、哀公十二年冬十二月、鍾仲尼曰、今火猶西流、司歷過也、並是魯歷、春秋時、各國之歷、亦自有不同者、經特據魯歷書之耳、史記秦宣公享國十二年、初志閏月、此各國歷法不同之一證、成公十八年春王正月、晉殺其大夫胥童、傳在上年閏月、上有十二月、哀公十二年春王正月己卯、衞世子蒯聵自戚入于衞、衞侯輒來奔、傳在上年閏月、上有冬、皆魯失閏之證、杜以爲從告、非也、史記周襄王二十六年閏三月、而春秋非之、則以魯歷爲周歷、非也、平王東遷以後、周朔之不頒久矣、故漢書律歷志、六歷有黃帝、顓頊、夏、殷、周、及魯歷、其於左氏之言失閏、皆謂魯歷、蓋本劉歆之說、五行志周衰、天子不班朔、魯歷不正、置閏不得其月、月大小不得其度、

〔藻鹽草二時節〕潤月　月の數そふ　月のかさなる　春くは、れる　夏、秋、冬も同かるべし、但歌には未見、春過て衣はは、やくかへて　しなやしき、閏四月一日にもなるぞあ　又その日にもなるぞあ　閏九月盡をよめる、春夏冬も是、おなじふ月　もつて心得おなじことなるべし、　のかずそふ　後のふ月共よめり、閏七月をよ　日かずをそふ　これも閏月の心也、但只日數をそふと　めるいづれの月にも云べし、　計にてはいかゞ、閏月のあつかい有べし、

〔日本書紀八仲哀〕元年閏十一月（ノチノシモツキ）

〔日本書紀通證十三仲哀〕閏十一月（ノチノ）　閏訓乃知、漢書作後某月、穀梁傳曰、閏月者附月之餘日也、積分而成于月者也、說文曰、餘分之月五歳再閏、告朔之禮、天子居宗廟、閏月居門中、从王在門中、

○按ズルニ、コレ閏月ノ事ノ見エタル始ナリ、

〔日本書紀二十敏達〕十年潤二月